



IUFRD NEWS

No. 110 (2013.11) —

「21st International Wood Machining Seminar (第21回国際木材機械加工セミナー)」開催報告

森林総合研究所 加工技術研究領域 村田光司

はじめに

2013年8月4日～7日に、21st International Wood Machining Seminar (第21回国際木材機械加工セミナー, IWMS-21) が、つくば国際会議場(エポカルつくば)において開催された。筆者は、組織委員および事務局として、本セミナーのつくばへの誘致から開催に至るまで、その運営に携わった。本稿では、つくば開催に至った経緯やセミナーの概要について報告する。

国際木材機械加工セミナーとは

国際木材機械加工セミナー (International Wood Machining Seminar, IWMS) は、木材加工技術の向上

と世界の木材資源の有効活用を目的に、1963年の第1回から第10回までは、アメリカ合衆国のカリフォルニア州立大学バークレー校(UCB)で開催されていた。その後、北米、欧州、アジアの持ち回りで2年毎に開催することとなり、現在に至っている世界で最もレベルの高い木材の機械加工に特化した国際研究集会である。木材切削の基礎、切削用工具材料と工具摩耗、挽き材、鉋削、型削り、ルータ切削、研削といった木材の機械加工に加え、木材乾燥や熱処理など新しい木材加工法についても、最新の研究成果が発表されている。

日本では、1995年10月に初めて第12回IWMSが京都で、2003年8月に第16回IWMSが松江でそれぞれ



写真-1 集合写真

開催されている。前回の第20回IWMSは、2010年6月にスウェーデンのシェレフティアで開催された。

IWMSは、毎回、過去にIWMSに複数回参加したことがある研究者が中心となり組織委員会を組織し、手渡式的に開催し続けている。開催地の決定等の意志決定機関として、IWMS International Advisory Committee (IWMS国際諮問委員会)があり、日本からは、田中千秋氏(島根大学名誉教授)、奥村正悟氏(京都大学名誉教授)、服部順昭氏(東京農工大学教授)がメンバーとなっていたが、今回、若干の入れ替えがあったようである。

つくば開催の経緯

過去2回の日本での開催が京都、松江と西日本であったことから、日本国内のIWMS関係者の間では、松江開催前後にはすでに、「次に日本でIWMSを開催するときは東日本、研究者の数からつくばだね」という声上がり、「次の日本でのIWMSはつくば開催」が暗黙の了解事項となっていた。2007年の第17回IWMS(ドイツ・ローゼンハイム)開催中にアジアでの第19回IWMS開催地を決定することになっていた。第19回IWMS会場でIWMS国際諮問委員会の有力メンバーから「第19回IWMS開催候補として立候補してくれ」との要請があり、早速、第19回IWMSつくば招致の要望書を作成し、IWMS国際諮問委員会に提出した。しかしながら、IWMS国際諮問委員会では、熱心に招致活動をしていた南京に対する欧州のメンバーによる強い押しがあり、第19回IWMSの南京開催が決定された。これにより、つくば開催は第22回IWMS以降となると思われた。ところが、2010年4月にIWMS諮問委員会より「第21回IWMSをつくばで開催して欲しい」との打診が服部順昭氏にあり、関係者か協議し、順番が1回早くなるが、第21回IWMSのつくば開催を受け入れることにした。このように、若干の紆余曲折はあったが、この度のIWMS-21のつくば開催に至った。

IWMS-21の概要

IWMS-21の主催は、IWMS-21組織委員会、独立行政法人森林総合研究所、一般社団法人日本木材学会機械加工研究会、公益社団法人日本木材加工技術協会 製材・機械加工部会、国際森林研究機関連合第5部会製材・機械加工研究会(IUFRO 5.04.08)である。後援は、林野庁、一般社団法人日本木材学会、公益社団法人日本木材加工技術協会である。IWMS-21組織委員会(委員長:服部順昭氏)の下に、実際に準備・運営を行う実行委員

会を組織し、事務局は森林総合研究所木材機械加工研究室に置いた。

開催日の決定にあたり、海外からの参加予定者が参加しやすい時期を調べ、その時期で国内からの参加者が都合のいい期間を優先した。結果として、お盆直前で、最も暑い時期の8月4日～7日の開催となった。スケジュールの概要は以下の通りである。

8月4日:参加登録、ウエルカムレセプション

8月5日:参加登録、開会式、基調講演、口頭発表、展示発表

8月6日:口頭発表、インセミナーツアー、バンケット

8月7日:口頭発表、閉会式

なお、8月8日～10日には、海外からの参加者を対象としたオブショナルのポストセミナーツアーも実施された。

参加者は、同伴者なども含め15カ国110名である。海外からの参加者は43名であった。海外からの参加者数は、第16回IWMS(松江)の49名には及ばなかったが、同アジアでの開催で30名に達しなかった第19回IWMS(南京)より多く、主催者としては、これだけでも満足のいくものであった。

開会式

開会式は、8月5日午前9時、定刻通りに始まった。まず、IWMS-21組織委員会委員長の服部順昭氏の開会挨拶があり、次にIWMS諮問委員会委員長のGary Schajer氏(カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授)の挨拶があり、最後に大河内勇氏(森林総合研究所理事)の歓迎挨拶があり、開会式は終了した。

基調講演

基調講演は、大熊幹章氏(日本農学会会長、東京大学名誉教授)にお願いし、「Searching for a New Figure of the Wood Industry and Wood Utilization in Japan」と題する講演をしていただいた。日本において環境に優しい「木材の時代」がやってくると言われているが、真の「木材の時代」にするには、スギの人工林資源を有効利用していかなければならない。スギは木造住宅の構造材として使用されているが、スギは乾燥しにくい、在来軸組構法住宅構造材の寸法の種類が多すぎて効率的でないという問題がある。この問題を克服するために、厚板の利用を提案する。厚板は、正角より乾燥が容易であり、寸法の種類が少なく、大量生産に向いている。梁などの大断面には、乾燥した厚板を3層に貼り合わせた「合わせ材」を使用する。北米のディメンジョンラン

パーとツーバイフォー工法を参考にし、十分に乾燥され、品質の標準化された厚板と合わせ材を在来軸組構法住宅構造材への利用による在来軸組構法の簡素化が木材利用に革新的な変化をもたらす引き金になると述べられた。

研究発表

口頭発表は、「工具材料と摩耗」3件、「切削過程」4件、「挽き材」5件、「加工制御」5件、「研削と表面評価」3件、「エンジニアードウッドプロダクツ」2件、「他の生産技術」3件の合計25件であった。ほとんどの発表に対して活発な討議が行われ、時間超過のために座長が討議を打ち切ることもあった。これまでのIWMSでは、口頭発表件数が多いと2会場で口頭発表を行うことがあったが、2会場では参加者が聞きたい発表が重なり、どちらかを聞くのをあきらめなくてはならないこともあった。IWMS-21では、1会場で実施できるように口頭発表件数を調整し、参加者はすべての口頭発表を聞くことができるようにした。

展示発表には、33件の発表があった。5日の午後、1時間30分の説明・討議時間を設けたが、その後の30分間のコーヒーブレイクまで熱心な説明・討議が続いた。展示期間を5日午前から6日午前までとし、開場

をコーヒーブレイクと同会場とし、参加者はコーヒーブレイク時にも展示を見ることができるよう配慮した。また、展示会場のスペースに余裕を持たせたので、窮屈にならずに展示発表の討議が行えた。

インセミナーツアー

IWMSでは、2日目の午後に木材加工工場を見学するインセミナーツアーを実施することが恒例となっている。今回は、茨城県坂東市内のボラテック板東工場と森林総合研究所を見学した。

当日、午後から雨が降りそうだったため、急遽、午前中に参加者のためのビニール傘を30本用意した。森林総合研究所内は、雨の中、徒歩移動となったが、問題なく見学を終わらせることができた。

ウエルカムレセプションとバンケット

ウエルカムレセプションは、4日の午後6時30分より、エポカルつくば内レストラン・エスポワールにて開催した。服部組織委員長の簡単な挨拶の後、大熊東京大学名誉教授の乾杯の音頭でウエルカムレセプションが始まった。久しぶりに顔を合わせた参加者達が、和やか雰囲気の中、牛久ワインを飲みつつ、旧交を温めていた。

バンケットは、5日、ホテルグランド東雲で開催した。インセミナーツアーの森林総合研究所の見学が予定時刻より遅れたため、バンケットの開始まで時間的余裕がなくなったが、予定通り午後7時よりバンケットを開始した。服部組織委員長の挨拶の後、鏡開き、第16回セミナー（松江）の組織委員長であった田中千秋島根大学名誉教授の乾杯の音頭で開宴となった。各席にIWMS-21のロゴ入りのヒノキの枅を配り、鏡開きの清酒（茨城の地酒）を飲むのに使用した後、持ち帰ってもらうようにした。余興は、「常陸乃国ふるさと太鼓会」の演奏とした。迫力ある和太鼓の演奏に参加者は楽しんでもら



写真-2 口頭発表



写真-3 展示発表



写真-4 インセミナーツアー

えた。翌日の口頭発表では、何人かの発表者が「昨日のパンケットはよかった」と発表の冒頭でコメントしたことからも、参加者には満足してもらえたパンケットであったと思う。

コーヒーブレイクでは、つくばの菓子も提供した。つくばの菓子を食べてもらえるかと心配していたが、なかなか好評であった。

閉会式

服部組織委員長のセミナー中第4回目の挨拶で閉会式が始まった。その後、服部組織委員長より次期組織委員長のRoger Hernandez氏（カナダ・ラヴァル大学教授）の紹介があり、記念品が交換された。Hernandez次期組織委員長が第22回セミナーを2015年6月14日～17日にケベックシティで開催すると紹介し、IWMS-22のプロモーションビデオが上映され、会場に参加を呼びかけた。Schajer IWMS 諮問委員会委員長よりつくば開催への感謝の挨拶があった。そして、服部組織委員長の閉会宣言により4日間のIWMS-21が無事幕を閉じた。

同伴者プログラム

5日は、同伴者プログラムとして東京ガイド付き1日ツアーを実施し、5名の参加であった。6日午前には、日本文化体験として、ボランティア講師による折り紙体験を実施し、こちらも5名の参加であった。両プログラムとも好評であった。

ポストセミナーツアー

3日間のポストセミナーツアーには、35名の参加があり、茨城・栃木両県内を大型バスで回った。

8日午前は、筑波宇宙センターを見学した。夏休み中のためガイド付き見学の予約が取れず、一般の自由見学となってしまった。8日午後は、茨城県高萩市にある東部大建工業高萩工場を見学し後、宿泊先の宇都宮市内のビジネスホテルに移動した。

9日は、まず鹿沼市内の栃木県森林組合連合会鹿沼共販所を見学した。次に、日光杉並木を見学した。当初、車窓からの見学の予定であったが、ハンガリーからの参加者の強い希望により、バスを下車しての見学となっ

た。その後、華嚴の滝を見学し、昼食後、日光東照宮を見学し、輪王寺三仏堂を見学した。輪王寺三仏堂では約50年ぶりの大修理が行われている。IWMS-21 実行委員の藤井義久京都大学教授がこの大修理に関わっており、輪王寺と日光社寺文化保存会の特別なはからいにより修復現場を見学させていただけた。文化財の修復現場を間近に解説付きで見学する機会はまず無く、参加者にはたいへん有意義なものであった。

ポストセミナーツアー最終日の10日は、国産材製材最大手のトーセングループの那珂川工場と西那須野工場を見学した。東京駅を経由してつくばへと戻り、予定時間を遅れたものの、無事、酷暑のポストセミナーツアーが終了した。

おわりに

参加者数100人程度の小さな手作りの国際研究集会であるが、開催準備・資金調達から運営までかなりの苦労が伴った。海外からや学生が参加しやすいように参加登録費を低く抑え、参加者が満足するセミナーとなるよう努力した結果、海外からや学生の参加も多く、大成功に終わらせることができた。

セミナー開催にあたり、開催資金を助成していただいたIUFRO-J、国土緑化推進機構、つくば観光コンベンション協会、つくば科学万博記念財団に深く感謝します。また、協賛していただいた諸団体・企業、後援していただいた林野庁、日本加工技術協会、日本木材学会、ご多忙中にもかかわらず見学に対応していただいたボラテック、森林総合研究所、東部大建工業、栃木県森林組合連合会鹿沼共販所、輪王寺、日光社寺文化保存会、トーセンに深く感謝いたします。また、運営に協力していただいた森林総合研究所職員に感謝の意を表します。多忙な業務の合間に献身的に開催準備をし、労力を惜しまずセミナー運営にあたっていた実行委員各位並びに服部組織委員長に心から深く感謝いたします。

特に意識することはなかったが、今回のIWMSは第1回から50周年目にあたる節目と言えば節目のIWMSであった。100周年を迎えられるようIWMSが開催し続けられることを期待したい。

IUFRO3.08&6.08 合同研究会「小規模林業とコミュニティ林業の未来に向けて」の開催報告

九州大学大学院農学研究院 佐藤宣子

1. はじめに

IUFROの3.08研究グループ（小規模林業）と6.08研究グループ（ジェンダーと林業）の合同研究会を2013年9月8日～13日に福岡市の九州大学医学部百年講堂において開催した。3.08グループの研究会は1997年京都開催に次いで2回目、6.08グループは日本初の開催で、両グループの共通テーマとして、“Future Directions of Small-scale and Community-based Forestry”を設定した。

IUFRO6.08.01の副コーディネーターを務めている関係で佐藤が組織委員長となり、共催団体の林業経済学会の会員から、大田伊久雄氏（愛媛大学・査読委員長）、堀靖人氏（森林総合研究所）、葉山アツコ氏（久留米大学）、百村帝彦氏（九州大学）、川崎章恵氏（同、事務局長）に参加いただき、6名で組織委員会を2012年春に立ち上げ、準備を進めてきた。

参加者数は、合同研究会に86名（15ヶ国、海外から51名）で、初日のシンポジウムへの一般参加者66名と合わせ、述べ152名であった（写真-1）。また、報告数は口頭発表45件、ポスター報告26件の計71件であった。

2. シンポジウム「女性からみた世界の森林・林業」の内容

初日の9月8日に、オープニングセッションと大田伊久雄氏による日本の小規模林業と政策課題に関する基

調講演の後、午後には同時通訳付きで、一般市民にも開放したシンポジウム「女性からみた世界の森林・林業～小規模林業とコミュニティ林業の未来に向けて～」を開催した。

シンポジウムはヨーロッパ、アメリカ、途上国および日本の現状について下記4人の女性研究者が基調講演を行い、その後、土屋俊幸氏（林業経済学会会長・農工大学）をコーディネーターとしてパネルディスカッションを行った（写真-2）。

基調講演1.「ヨーロッパの小規模林業におけるジェンダー問題」：ギュン・リーデスターフ氏（スウェーデン農科大学・IUFRO6.08 コーディネーター）

基調講演2.「木陰に座ってジェンダー、参加、コミュニティ・フォレストリーを考える」：エスター・ムアンギ氏（国際森林研究センター（CIFOR））

基調講演3.「アメリカ合衆国における女性森林所有者」：ニコール・ストロング氏（オレゴン州立大学）

基調講演4.「日本の森林・林業分野におけるジェンダー関係と女性グループの役割」：佐藤宣子（九州大学）

近年、海外の森林・林業の実態や制度の情報が多く日本に紹介されているものの、社会的・文化的な男女のあり方を問うという意味のジェンダー視点から森林・林業を議論した研究や林業への女性参加の実態はほとんど紹介されていない。筆者自身、本シンポジウムによって、



写真-1 研究会参加者の集合写真



写真-2 シンポジウムでのパネルディスカッションの様子

ヨーロッパとアメリカにおいては私有林の女性森林所有者が増加していること、スウェーデンでは森林・林業分野の男女平等が国家戦略に位置づけられていること、アメリカでは各地に女性森林所有者グループが設立され、女性が参加しやすいワークショップやソーシャルネットワークを用いた普及事業のあり方が開発されていることなど、初めて聞く内容であった。また、先進国と途上国には異なるジェンダー問題があるものの、両者を合わせて議論することによって、森林管理に女性が参加することは木材生産目的だけではなく、生活に密着した非木材生産物やレクリエーション利用、景観保全など森林の多様な価値を見出すことに繋がるという点も認識できた。

パネルディスカッションでは、①小規模林業やコミュニティ林業に女性が参加することの意義、②女性グループの役割、③何を契機に林業・森林分野の男性優位社会は変わっていくのか（変わってきたのか）？その際の政策・制度的な意義付けは何かという3点について、議論を行った。最後に、コーディネーターから、日本において森林政策、研究ともにジェンダー視点が欠けており、今後強める必要があるとのまとめがあった。なお、フロアーからの質問も多数あり、その全てが女性からの発言であった。日本でも近年「林業女子」の活動など日本独自の森林・林業分野への女性参加が広がっている、その現れだと感じた次第である。

3. 研究発表と若手研究者の表彰

研究会2日目～4日には、1日3報告をプレナリセッション（小規模林業、コミュニティ林業、ジェンダーと林業）として1つの会場で開催し、その他は2または3会場に分かれて分科会形式で口頭発表を行った（写真-3）。また、10日にはポスター発表のコアタイムを設定した。発表プログラムは、次のURLに掲載している（<http://ffpsc.agr.kyushu-u.ac.jp/policy/>）。



写真-3 テッポセッションでの議論風景

IUFRO/Program.pdf)。

先進国を対象とした研究では、小規模森林所有者の高齢化や都市への移動に伴って森林所有者の森林管理意向がどのように変化しているか、またそうした変化に適應した政策のあり方（森林組合の役割や施業の集約化など）、小規模所有者に有利な木材販売方法、市民の林業意識の変化などが発表された。途上国を対象とした研究では、森林のアクセス・保有権問題やコミュニティ・フォレストリーへの住民参加、REDD プラスへの住民の関心、非木材生産物の重要性、女性がコミュニティの森林管理の決定に参加できない実態などが報告され活発な議論がなされた。台湾と韓国、日本の分科会では集落の高齢化の実態と共に、高齢女性が山村地域で活躍していることが議論されるなど、東アジア共通のテーマが議論できた。

また、35歳以下の口頭発表者を対象にしてサイエンティフィック委員会によってヤングリサーチャー賞が選考された。今回は東フィンランド大学の博士課程のKatri Hamunen氏が受賞した。また、ポスター発表も重視するという3.08研究グループの方針もあり、同研究会では初めてポスター賞の授与を行った。組織委員が選考委員となり、ポスター賞3名（上村僚氏（宇都宮大学）、峰尾恵人氏（京都大学）、Ratih Madya Septiana氏（九州大学））を選考した。両受賞者は閉会式で発表し、記念品を贈呈した。

4. テッポセッションとフェアウェルパーティー

研究会最終日の9月11日の午後、3.08研究グループで恒例となったテッポセッションを行った。同セッションは、フィンランド森林研究所のTeppo Hujala氏が提唱して始まったもので、研究テーマについてフリーディスカッションをするものである。小規模林業研究、コミュニティ林業研究、ジェンダー研究の3つに参加者が自由に分かれ、参加各国の現状や将来の研究課題、共同研究の可能性など活発な議論が行われた。それぞれのセッションでの議論内容は閉会式で報告され、テッポ氏を取りまとめて参加者で共有した。

閉会後は会場近くで、国の有形文化財にも登録されている石蔵酒造「博多百年蔵」に移動し、フェアウェルパーティーを行い、親睦を深めた（写真-4）。

5. 現地見学会

現地見学会では9月9日午後に福岡県八女地域、12日～13日の1泊2日で大分県日田地域と熊本県小国町へ訪問した。農林家の自伐現場や林間ワサビ生産、棚田



写真-4 フェアウェル・パーティの様子

の景観、森林組合による小規模所有者の施業集約化、原木市場、和風建築での多様な木材利用、建具生産、地熱を活用した木材乾燥現場などを見学した（写真-5、6）。

宿泊地は小国町の杖立温泉、木造3階建ての温泉宿を利用した。和室で5～6人の相部屋、畳部屋での宴会となった。浴衣に来て夜中まで研究内容について話し



写真-5 見学会の様子（熊本県小国町時松建具製作所）

込んだことは、忘れられない・・・帰国後、海外の参加者から頂いたメールである。

6. おわりに

2012年春に本合同研究会の組織委員長を引き受けたものの、国際研究会の主催者などできるだろうかと不安を抱えつつ過ごしてきた。今、無事に終了できたことに安堵している。成功裏に開催できたのは偏に組織委員をはじめ、協力して下さった方々のおかげである。貴重な経験と新たな出会いがあり、参加各国に多くの友人ができた。

本研究会を開催するにあたり、IUFRO-Jからも助成いただいた。紙面を借りて、IUFRO-Jならびに開催に協力いただいた方々にお礼申し上げたい。

なお、本研究会のプロシーディングスは2013年中に発行・ホームページ上（<http://ffpsc.agr.kyushu-u.ac.jp/policy/IUFRO/IUFROF2013.html>）で公開する予定である。



写真-6 現地見学会の集合写真（小国町240年生スギの前で）

事務局からのお知らせ

1. IUFRO-J 研究集会事務局・参加助成の募集について

平成27(2015)年3月までに開催されるIUFRO関連研究集会に対して事務局・参加助成を行います（参加の場合は海外での集会のみです）。希望者は平成25(2013)年12月末日までに、規定の書式にしたがい助成申請を提出してください。申請書の様式は下記のウェブサイトからダウンロードできます。

<http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/iufroj/jyosei.htm>

2. IUFRO-J 平成26年度機関代表者会議のご案内

第125回日本森林学会大会が大宮ソニックシティで2014年3月27日（木）～30日（日）の日程で開催されます。それにあわせて表記会議を開催致しますので、機関代表者の方のご参加をお願いいたします。

日時：2012年3月29日（土） 昼休みを予定

場所：大宮ソニックシティ内（詳細は未定）

議題：会務報告、会計決算報告、監査報告、事業計画案、予算など

GFIS-Japan Training Workshop に参加して

森林総合研究所国際連携推進拠点 藤間 剛

2013年10月24日午後と25日午前中に、GFIS-Japan Training Workshop が森林総合研究所を会場に開催された。同ワークショップは、日本国内のGFIS情報提供者と情報利用者を増やすことを目的に、IUFRO-GFIS事務局主催、森林総研共催で実施され、GFIS事務局、東京大学、名古屋大学、九州大学、国際熱帯木材機関（ITTO）、森林総研から合計17の参加者があった。

GFIS の概要

ワークショップはまず、GFISの概要およびウェブサイトを通じた情報発信に関する講義で始まった。GFISは、Global Forest Information Serviceの略称で、IUFROもメンバーとして参画するCollaborative Partnership on Forests（CPF）の活動の一つである。GFISは森林・林業に関連した情報に関する検索エンジンである。グーグルのような一般の検索エンジンとの最大の違いは、GFISの検索結果がGFISに参画する森林関連組織から提供された情報に限られることである。またGFISの検索結果は、ニュース、イベント、出版物、公募などの項目ごとに、一定の書式に従って表示される。一般の検索エンジンでは、出所のわからない情報がばらばらの書式で示されるのに対し、GFISの検索結果は（慣れれば）わかりやすい構造になっている。一般の検索エンジンを用いた検索後の情報の取捨選択に苦労している方は、一つのオプションとして、GFISを使ってみると良いような気がした。

日本からの情報発信の課題

GFISに関する講義に続き、ワークショップに参加した各機関の参加者が、それぞれの所属機関がどのような情報発信をしているのか、情報発信先や情報発信方法に関する発表を行い、情報発信に関する課題について議論した。日本の大学や研究機関による情報発信は、日本語によるものが主流で、学術論文を除けば英語や外国語での情報発信は限られたものになりがちである。また大きな組織のウェブサイトは組織全体で管理運営されるため、掲載内容や更新頻度の小回りがききにくいことがある。この二つの課題に対しては、次のような解決策があった。GFISはすでに日本語対応がなされており、検索して日本語の情報のみを表示することができる。また逆に、検索結果として日本語を指定しない限り、日本語

の情報が検索結果にはあらわれない。そのため、GFISに対しどれだけ大量の日本語情報を提供したところで、日本語を読むことができない利用者が影響を受けることはない。また英語の情報をGFISに送ると、GFISの英語のトップページに新着情報として掲載され、GFISサーバー内に検索可能な形で蓄積される。日本人が英語のウェブサイトを作るため費やす労力に比べると、ウェブサイト情報をGFISに提供するのに必要な労力は微々たるものである。GFISへの情報提供は、大きな組織のウェブサイト全体を対象とする必要は無く、研究科や研究室やプロジェクトチーム等の個別のウェブサイトをもつ組織内の小グループからでも可能である。

GFIS への情報提供

GFISへの情報提供は、GFISウェブサイトから情報提供者登録をすることで、可能になる。実際の情報提供は、事務局からの登録受け付け連絡後にGFISウェブサイトを通じておこなう。この作業には特別な知識は必要なく、ウェブサイトを通じた情報発信を担当している方であれば、十分対応できるものである。それなりの労力をかけてウェブサイト管理運営しているのなら、GFISを活用した研究成果の効率的な発信を試してみる意味はあると思う。

同ワークショップは、韓国森林研究所とAPAFRIの経費負担、森林総合研究所の会場提供と開催支援により実施された。

参考文献

- GFIS Website: <http://www.gfis.net/gfis/ja/en/>
 後藤忠男. 2013. Global Forest Information Service (GFIS (ジフィス)) の紹介. IUFRO-J News 108: 8-10
 光田 靖. 2007. Global Forest Information Service Training Workshop 報告. IUFRO-J News 90: 1-2

IUFRO-J News No. 110 平成 25 年 11 月 28 日
 国際森林研究機関連合 - 日本委員会事務局
 〒 305-8687 茨城県つくば市松の里 1
 森林総合研究所 国際連携推進拠点
 TEL 029-829-8327
<http://www.ffpri.affrc.go.jp/labs/iufroj/>
iufro-j@ffpri.affrc.go.jp [編集・発行]